

展評

前田 比呂也

食べてしまいたいほど絵の具が好き、と言ったのは洋画家の三岸節子だったと思う。日本画に出合い、魅了され、35年にわたり描き続けてきた池宮城友子の初の個展である。展示されている多くの秀作の中から、キヤンプタルガニーでこそ見るべき3点について語る。初期作品群を代表する



流露

「事実」重ね愛おしむ

池宮城友子展 平和と鎮魂

『流露』について。頭部の一枚一枚は失われつつあなラワン（ワカモノ）の空は艶消し（ツヤ消し）で無関心を抱え、青サングを育む豊かな海は細かな表情のうつろいを見せ美しい。中央の杭は、民意を押し殺すかのようにジェーンで徹底して地塗りし、ケミカルなアクリル絵の具で彩色することで、均一で無表情な外圧の異常な力を示す。空と海の境となる遠景に、水墨のような鳥影が見える。この部分だけドーサ引きをせ散りばめられ、白と赤のアカバナが蠟細のように張り込まれる。屏風仕立てだから見る者の立ち位置で表情が変わる。赤い川の流れる大きな歴史と例えると、個人の小さな物語を囁くような背景の木目の流れは、繊細で多様な情念を抱え確かな存在感を持つ。

展示室から続く庭の芝生で雑草をむしっていたタルガニーの大田さんに伺うと、この美術館の意義は「事実」だとのこと。沖縄の過去に起きた事実と現在に横たわる事実、池宮城の人生に起きた事実、女性が抱える社会での生きづらさ、日常と非日常、様々な事実が重なり合い、変化しながら時間は流れる。私にはせつかに見える池宮城が、段取りの多い日本画とともにあるのは、作画途中で現れる小さな「事実」を人生に重ねながら愛おしんでいこうと決めたからではないのだろうか。

（漆工房・前田貝掬案）

ず、コントロールできない自然な滲みを出した。まるで実在が理不尽な力で変化を強いられていくように。『忘却の川』について。杉板に墨を施し研磨しては塗り重ね木目を浮き立たせた。その上に古代朱で暗黒へと流れていく血の川を描いたという。しかし、この赤は水の流れのマチエールではない。作品の背面のキヤンプタルガニーの赤い壁が視界に入る。そうだ、この赤は多くの悲しみと血の染み込んだ米須の土だと思いつく。杉材が作り出す木目が縦に流れる画面には箔が

「池宮城友子展 平和と鎮魂―35年の歩み―」は糸満市米須304のキヤンプタルガニー アーティストアットファームで26日まで開催。開館は11時から日没まで。